# たより

ユッカの会会報 第18号 平成18年12月16日(土)発行
横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2 かながわ県民センター12階
かながわボランティアセンター(情報コーナー)内 ユッカの会代表 沼波万里子

## 生きていて良かった

沼波 万里子

今年は日本ばかりでなく、世界中が天災に襲われ、死者負傷者共に例をみない惨状のつづいた年でした。横浜という恵まれた地域に住む私達は本当に幸せだと思わずにいられません。ただ最近、一番心を痛めるニュースは、いじめによる自殺があまりにも多く報じられることです。命を大切に、自殺などもってのほかと申し上げたいところ、実は私自身自殺を思い立ち奇跡的に命を落とさずにすんだ経験をもっており感慨無量の感があります。

それは引揚げ船上の事でした。夫も子もすべてを失い、帰るべき横浜は焼野原、待つべき親もいない私は将来に夢も希望もなく、ふらふらと甲板へのぼっていったのでした。ところが偶然にもそこに正に海へ飛び込もうとしている婦人がおられ、私は思わず後から抱きとめてしまったのです。二人は言葉もなく、へなへなと坐りこんでおりましたが、やがて呆然と船底へ戻り数日後何とか日本の地を踏む事となりました。引揚げ後ボランティアを志し、先ず生活指導員として中国帰国者の家庭を訪問しております中、訪れた家庭のお子様が一様に学校でいじめに合い、それがとても深刻な事に気付いたのです。ひと頃は唯々その対策に追われておりました。

現在、その時の子供さんがそれぞれに成長して結婚され、お子様にも恵まれ幸せそうな写真を添えてお便りを下さるのです。「苦しみを乗り越え、生きていて良かった。」その一言がどんなに嬉しかったか知れません。

ユッカの会で共に学び楽しんでおられる皆様もこれからの長い人生には色々な事に遭遇されることでしょう。良い時に甘えず、苦しい時にくじけず、どうぞ強く生きていって下さい。ここに当会の方々の変らぬご尽力、その活動に心より御礼申し上げ、今後も息長いユッカの会の発展を祈ってやみません。

(ユッカの会代表)

# モンゴルの少年、ナムハイ君

星 ノブ

今年の10月から、モンゴルの少年、ナムハイ君がセンターに学習に来ている。彼は外モンゴル出身で、今年17歳、2月末に日本に来た。それほど背が高くないし、太ってもいない、身軽な体形で、顔だちも日本人と見分けがつかない。モンゴルで中学校を卒業していて、日本で高校に進学したいという。内モンゴルは漢字が通用するが、外モンゴルは通用しない。まず漢字を学習したいというのが当面の目標である。

以前、定時制高校に通っているミャンマーの青年が漢字を学習したいとセンターに来ていたことがある。媒介語もなく全く言葉の通じない人に、どのようにして漢字を伝えたらいいのだろうか。この青年は20歳くらいのベトナム難民で、難民支援センターで作ったテキストを持っていた。漢字をミャンマー語（？）で説明したそのテキストを頼りに学習した。いつも柔和な微笑を浮かべて、低い声で自信なさそうに発音していた。半年くらい学習したろうか、仕事が忙しくなって来なくなった。もっといろんなことを話したり、聞いたりしたかったが会話はあまりはずまなかった。

その点ナムハイ君は日本語でよく話すので助かる。日本に来て約8か月、それにしては上達が早い。彼は午前中12時まで働き、センターへ来てお昼を食べ、1時から3時まで学習してまた職場へ戻って働く。結構厳しい生活で疲れるようだが、苦しいとかいやだとか思っていないようだ。働くことも学習することも、しなやかな体と頭脳で、ごく自然に受けとめているようだ。

ナムハイ君はよく質問するし、モンゴルのこともよく話してくれる。この間は「ホーショウ」という餃子に似た食べ物の作り方まで教えてくれた。また、「これはお父さんと作ったピロシキです」と言ってピロシキをたくさん持って来た。私も一つもらって食べた。素朴な味がした。ナム君は「私は20個くらい食べます」と言って、持って来たたくさんのピロシキをみんな食べてしまった。大変な食欲である。そして「朝青龍は100個くらい食べるかなあ」と言っている。そういえば、あのモンゴルの力士たちと同郷なのだ。

ある日のこと、彼は日本語能力検定試験の問題集を持って来た。検定試験1級に申し込んであって、試験の日が迫っているという。私はびっくりしてしまった。高校の受験勉強が優先されるべきではないか。それに検定試験1級はナム君の日本語能力ではちょっと荷が重い。合格の可能性はほとんどないと思われる。だが、そん

なことを言っても仕方がない。すでに申し込んであるのだ。2回ほど問題集を勉強した。やってみると勘がいいというか、結構よくできるのである。これもまた驚きであった。試験がすんで結果をきいたら50%くらいできたという。やがて得点が通知されるだろう。

さあ、高校入試に全力投球である。志望校はまだはっきりしないが、社長は神奈川総合高校を受けたらどうかと言っているという。これにも私は驚いた。外国人枠があるとは言え、希望者が殺到するから、ちょっと無理ではないか、と口に出かかった言葉を私はのみこんだ。すぐランク付けをしたり、焦ったり慌てたり、あれこれ取り越し苦労したり、いつの間にか受験競争の悪しき慣習に染まってしまった自分自身を反省した。

日本の受験生たちは今ごろ、最も緊張した時を過ごしているだろう。本人だけでなく、親も先生も必死に応援しているだろう。ナム君は実に屈託なく、一日の仕事と一日の学習を平常心でこなしている。社長がついている。T高校の先生もついている。横浜国大に留学中の母親もついている。もし合格しなかったとしても次善の策が講じられるだろう。私が余計なことを心配しなくてもいい。ナム君はモンゴルの大自然の中ではぐくまれた柔軟な心を持ち続けて自分流にがんばってゆくだろう。

ナムハイ君のフルネームは ナムハイ ジャン ツアン という。ナムハイという名はおばあちゃんが付けてくれたのだそうだ。おばあちゃんは仏教を信じているので、ナムアミダブツのナムではないかと、友人は言っているという。モンゴルにも仏教が伝わっていて、信じる人がいると聞いてとても嬉しい。おばあちゃんに会ってみたい。（横浜教室・ボランティア）

# 旅は何時終わるのでしょうか？

中村 明子

先ごろ、井出孫六氏の“終わりなき旅－「中国残留孤児」の歴史と現在” という本を読みました。この本は1986年1月に岩波書店から刊行され、2004年8月に岩波現代文庫として改版されたものです。これまで、私自身も満州引揚者であり、身近に開拓団の人々の悲惨な状況も目にしましたし、知人に開拓団から生き延びて故国に帰り着いた人々もいましたので、満州開拓団のことはよく知っているつもりでした。しかし、この本を読んで開拓団の歴史や、そのいきさつについて殆ど何も知らなかったことを思い知らされました。

著者の郷里長野県は旧満州に送られた開拓団27万人のうち12.5%をしめる約3万4千人を送った全国一の送出県でした。こ

の本は5年の年月を費やして完成された「長野県満州開拓史」や「東宮鉄男伝」その他の多くの資料に基づき、また多数の人の証言を聞き取り、綿密な分析と、事実の積み重ねによる生々しい描写によって、いままでおぼろげに分かっていた満州開拓団の歴史と、それによって来るところの中国残留孤児の悲劇を明確に描き出してくれました。最初の刊行が1986年という時点なので、引用されている数字や証言はかなり古いものですが、むしろ20年を経ても何も進展していない、少しも良くなっていないという現在の状況がよりいっそう鮮明に感じられるのです。著者は本の中で、残留孤児の肉親探しが始まった1985年を、「あまりにも遅かった、40年は彼らにとってあまりにも長すぎた」と何度も繰り返しています。国策によって組織され満州の地に送られ、挙句の果てに遠い異国の地に置き去りにされた同胞を、その事実を知りながら40年間何一つ救いの手を伸べることなく放置してきた、国の責任、為政者の怠慢を厳しく糾弾する著者に共感しつつも「そういう自分は何かしたのか？ この平和な国でのうのうとした人生を送っていただけではないか」と忸怩たる思いで、本の中での辛い経験のくだりを読むとき、何度も涙を抑えることができませんでした。表題の“終わりなき旅”はこの問題が残留孤児の人たちにとって、まだまだ終わってはいない長く辛い人生の途上にあることを私たちに知らしめています。今、私たちがユッカの会でやっていることは、本当に小さな小さなことですが、それでも、毎週楽しみにして集まって来られる残留孤児だった方が何人もいます。それさえも横浜市の福祉パスの廃止によって足を奪われ、あきらめなければならない人が出ているのです。こんな悲しいことが許されるのでしょうか。また、残留孤児訴訟について、いまさらとか、仕方がないことではないか、などという人にも是非この本を読んで下さいとお願いします。この人たちの旅が終わらない限り、私たちにとってもまだ戦争は終わっていないのですから。（横浜教室・ボランティア）

# 七五三の着物

内田 智子

今年の1月29日に、孫の七五三のお祝いとして、ユッカの会の先生に和服姿の記念写真撮影をお願いしました。

この日はちょうど成人式の方の記念撮影とパーティーがありましたから、孫も一緒に撮影していただきました。写真館では、先生たちが慣れた手つきで孫をほめたりしながら、身体が動かないようにじっとさせて、手早く着付けを済ませました。孫は扇子や刀を身につけるのは初めてのこと

で、とても不思議に思っていました。写真を撮るまでの間、何回も刀を抜いたりして大変でした。

薄いグリーン色の袴を着た孫は、本当に男の子らしく見えて、初めて孫のこの姿を見た私も、とても嬉しい気持ちになりました。私は日本に来て本当に良かったと思います。この写真は孫にとって一生の記念になります。

中国では、今と私たちの育った時代では全然違います。私は兄弟が五人います。小さいときの写真はあまりありません。生活が大変で子供が多かったので、写真をとる余裕などありませんでした。

中国の昔の習慣では、子供が生まれてから100日目にお祝いをします。親戚や友達を集めて食事をします。まだ座れない赤ちゃんをなんとかして座らせて、簡単に写真を撮ります。それが記念写真です。

でも、現在の中国は、生活レベルが高くなりました。各家庭は一人っ子になって、生活にも余裕ができました。今では、中国でも子供は家族皆の宝で、写真も沢山撮ります。昔とはずいぶん変わりました。

中国出身の嫁も、先生方のご協力で和服をきれいに着させていただきました。来日してから10年経ちますが、初めての経験でした。嫁は一番好きな淡いピンク色の和服を着ることができて、とても喜んでいました。

着物がとても気に入った嫁は、日本で生活している弟の結婚式には絶対着物で出席したいと言っています。この日、私たちは改めて日本特有の文化を感じることができました。

私と嫁の母は、昔、中国で近所に住んでいた友達でした。私が日本に来る前に、私達は一緒に日本の映画を観ていました。嫁の母は日本人の和服姿を見て「日本に行ったら日本人の背中に何が入っているのかよく見て、私に教えて」と言っていました。

私は日本に来てから、いろいろな和服の帯の結び方を見て、本当に女性らしく、きれいに見えると思いました。そして私は、嫁の母に「日本人の女性の背中には何も入っていなくて、ただ帯のきれいな結び方でそういう風に見えるの」と教えました。

私は嫁の和服姿を見て、当時の嫁の母との会話を思い出しました。息子は嫁の和服姿を背中から何枚も撮りました。その写真も一緒に中国の嫁の両親のところに送りました。

お忙しい中、私達のためにいろいろ用意していただき、成人式を祝うパーティーにも招待して下さいましてありがとうございました。先生方の真心に本当に感謝の気持ちで胸がいっぱいでした。手作りのケーキ、ジュース、お菓子、おすしなどいろいろあります。先生達には朝から準備

していただき、大変お疲れさまでした。

この日は、ちょうど旧暦で中国の元旦（春節）でした。私達には今日はとても充実した楽しい忘れられない一日でした。

（横浜教室・学習者）

# 私の故郷―洛陽

内田 琳

子供の七五三の記念写真撮影をきっかけに、初めてユッカの会に参加致しました。先生方のご好意により、子供にはグリーン、私にはピンク色の着物を着せていただきました。子供の凛々しい姿を目の前にし、生まれて初めて憧れの和服を身に纏った私は、嬉しさと感謝の気持ちで胸が一杯になりました。

写真撮影後、成人式を祝うパーティーにも招待され、私の故郷－洛陽の話に花を咲かせました。先生方のおかげで大変充実で楽しい一日を過ごすことができました。

どうもありがとうございました。

中国4千年の歴史の中で、洛陽は九つの時代の都として、龍門石窟や白馬寺、詩人白居易墓、関林等の名所古跡が数多く存在する他、牡丹の花で有名な国際観光都市です。

龍門石窟は洛陽の南郊外に位置し、敦煌、雲崗と共に中国の三大石窟と呼ばれています。伊水の岸に沿って、北魏孝文帝以来、歴代の皇族により、石仏の彫刻が持続され、洞窟が合わせて2千以上、石仏が十万体程あります。その中で、一番大きな洞窟は「奉先寺」で、一番美しい石仏は東洋のビーナスと言われる盧遮那仏。中国唯一の女帝－武則天の命令で作られた盧遮那仏は、慈愛深い眼差しで世間を見守り、女帝の容姿が映ってくるようです。

白馬寺は後漢時代に西域に派遣された使者は仏典を白馬に乗せて洛陽に帰ってきたことで建てられた後、2000年近くの歳月が流れました。長い間、インドの名僧はここで仏教を伝えていました。

洛陽の南の香山には、日本人に一番親しまれている唐の詩人白居易の墓所が有

り、斜めなる石径、岩石に包まれた池、大輪の洛陽牡丹・・・優雅な詩廊の石碑に「長恨歌」 「琵琶行」等の名詩が刻まれています。

洛陽は現在人口640万人あまりの重工業都市として、目覚ましい発展を遂げていると共に、三国志にもよく登場する歴史的名城であり、優れた自然環境にも恵まれていることから、中国人の中でも憧れの観光地トップ10に入ると言われています。毎年4月15日～25日、牡丹花会が開催され、色とりどりの牡丹は世界中の観光客を引き付けてくるようです。

9月～11月は秋晴れが多く、観光の良い季節ですので、ユッカの会の先生方もぜひ一度洛陽に足を運んでみては如何でしょうか？ きっと、今も変わらぬ洛陽の独特な雰囲気と風情に魅了されるに違いないと思います。2006年10月22日（筆者は内田智子さんのご子息夫人）

# ペット

山口 洋子

16年間飼っていたパグ犬の“ペペ”に死なれてもう2年余過ぎた。まだ土に戻す気にはなれない。といって新しい犬を飼うのは主人が反対だ。

主人はもともとハトしか飼ったことがない。迷い犬の“ペペ”を飼うのもはじめはいやがったが、子供が祖母に泣きついて“お前は戌年だから犬は大事にしなさい”と口添えしてもらってやっとペペは家族に一員になることが出来たのだった。

主人は一度もペペを散歩に連れて行ったことはなかったし、世話らしい世話もしたことはなかったが、それでもよく話しかけてはいた。そのペペとの別れがよほどこたえたのか、職場の広報誌に“戌年にちなんで”とペペの事を題材にして一文を寄せていたのが大分後になってわかった。曰く“どんなに小さな生き物でも死ぬときはつらい。年をとったら悲しみは一つでも少ない方がいい” 故に新しいペットを飼うのには反対なのである。

私の実家は大の動物好きで、私は犬猫に囲まれて育った。他にも家の中に九官鳥、庭の小屋には十姉妹、池には鯉、金魚、亀、物置には数え切れないほどに増えてしまったハツカネズミ、床下には飼っていたわけではないがイタチの家族が住み着いていた（鯉もイタチも伊勢湾台風で床上浸水

した時にどこかへ行ってしまった)。隣の空き地には夕方になるとコウモリが飛んでいた（昭和30年代の杉並の話である)。だから結婚後もいつも何かしらペットがほしいと思っていた。

今年の夏ベランダにカブト虫が飛んできた。後で聞いたら鎌倉ではよくあることだそうだ。早速空き箱に入れて西瓜を与えた。数日その状態だったが、マイホームがないのも、一匹暮らしなのもさびしかろうとペットショップに連れて行った。店主は箱を覗いて “メスだね” と言う。“どうしてわかるのですか” と尋ねると “ツノがない”。そうだ、カブト虫のオスは例の大きなツノがあったではないか！ “オスは売っていますか？” “オスはもういないよ”とのことだったので、それから数日間オスを求めてペットショップをさがし歩いたが、もうどこにもオスはいなかった。山持ちの友人にも頼んだが返事がない。以来カブト虫はマイホームで一匹住まいだ。時々ゆるんだフタのすきまから脱走して家中を飛び回ったりしているが、大きな音ですぐ所在が知れる。暗くなるとゼリー状のエサに身体ごと突っ込んで順調な食べっぷり、心なしか一回り大きくなったように見える。

エサがきれたので再びペットショップに行った。店主は “もう小袋でいいですか？” と言う。“すごくよく食べるんですけれど、どうしてですか？” “カブト虫は大概10月の半ばには死んじゃいますよ” “元気ですけれど” “寒くなると死んじゃいますよ” “日当たりの良いところにおいてやったり、暖かくしてやれば大丈夫ではないですか？” “いや、カブト虫はもうじき死ぬんですよ、やっぱり小袋にしておきますか？”。私は‘もうじき死ぬだろうから’と10個しか入っていない小袋を買う気にはどうしてもなれなかった。何度尋ねても店主は‘絶対死ぬ’と言う。死ぬのを見越してエサを買うなんてイヤだ。大袋を買って帰った。

カブト虫は何の愛想もないけれどまだ元気で、相変わらずゼリーカップに身体ごと突っ込んで元気に食べている。明日からもう12月だ。（横浜教室・ボランティア）

# 日本におけるの感想

魏 丹立

いつも時間のたつのは早いと言う感じを持っていて、日本にやってきてからまたたく間に1年になります。この一年間を振り返って、どんなことが身についたのかよく自分に聞いています。仕事に関してのことだけでなく、見聞及びそれによって考えたことはいっぱいがあります。

昨年の12月の初め、未練がましい気分で

家を離れました。そんな長時間の家族との別れは初めてです。妻の不快の顔を見て心に辛くても、「日本行きは仕事のためですね、日本語が上達でき見聞を広める一方で日本向けのプロジェクト経験の積み重ねるのはいいじゃないチャンスと思いませんか」と彼女に言いました。実は数年前に日本語の勉強の目的で、来日の希望があった。日本向けの仕事に携わっているのに日本語がずっと仕事上の支障です、日本で数年間の生活に通じないとこの状態が抜本的に改善は不可能だと思います。この点は彼女が納得してほしいと思いました。一年前の出発頃の情景はそうでした。

日本に一年間ほど滞在すると日本語がペラペラと思いきや、それは天才ならではのことと分かりました。毎日仕事をするだけで日本人と交流が少ない状態でペラペラならば天才でなくて何だろか。焦りの気持ちがある一方で確かに別の得がないというわけではなくて見聞と感想があります。

まず、どこに行っても環境は最初のイメージだと思います、日本に街道はきれいし、もちろん気持ちも良い。毎日の通勤のため天王町の川と戸塚の川を渡ると、きれいな流れにはたくさんの魚が見えます。よく止まって見ているひとは、食パンを魚に食わせています。川の辺でハトとか鶴らしいの鳥がいっぱいです。しかも人の近寄りに対して鳥はあまり飛び離れない、人間との関係が非常に親密でたまらない。素敵な自然生態環境と思います、これは一例にすぎない。感心することはそのことではなくて、みんなが環境を守っていることだと思います。

次に日本人は礼儀を気にすぎると言われています。その点は、来日前にもう知っていることでした。でも、日本に来ないとそんなことを深く理解出来ないと思います。「すみません」と言う言葉はだぶん一日中一番多く使われているだろう。幾つかの例を挙げて見よう。たとえば、エレベーターの乗る途中ある人はエレベーターに入る場合、「すみません」と言い出すのは多いでしょう。なお、満車の電車にはたとえ少し動きをとっても、「すみません」がよく使われていて、みんなの心には、抵抗感はある程度減少します。ただその以外の場合のみならず、その他の日常にも多いです。ある場合は、外国人は決して謝らないのに日本人は「すみません」と言い出されてなんて可笑しいという気分になります。しかし、日本人の人々は互いに礼儀を守ればこそ、人間は尊重理解し合って調和社会の築けると思います。

もう一つはサービスです。いいサービスと言うことは日本に来たことがある人たちにとって深い印象が残っています。どこに行っても迷うの心配がありません。掲示板があるところはどこでも英語、中国語、

韓国という外国語がはっきり書かれていて、案内がないところでも聞きに行くといつも熱心な助けを受けられます。分からない地方へ行くなら、インターネットでほしい情報を手に入れます。本当に便利です。また、商店であれ飲食店であれサービスがある場所なら愛想もいい。いいサービスのおかけで日本語があまりできなくても外出の心配がないんです。

最後、ボランティアと言うのは個人利益のためではなくて社会的公益活動に参加する人です。県民センターで多くのボランティアがいる事実とは日本人の意識の高さは想像に難くないです。早く日本社会に適応するためにボランティアらは外国人への精力を注ぎています。ありがたいことにボランティアのおかげで日本語会話チャンスをもらえることになりました。実際はただ日本語レベルの上達でのみならず、日本社会、文化及び知りたいことをボランティアから教えてもらうことが、だが理解できるかどうかそれは別なことです。

ユッカ会から多くのことを習得しまして心から感謝いたします、言いたいことがいっぱいですが日本語レベルが低いので、ここまで書きます。これからもっと多くの人がユッカ会に参加することを願っています。（横浜教室・学習者）

# 心のふる里・松本

岡部 祐未子

私は転勤族だった為、いろいろな地方で生活しましたが、一番好きな場所は長野県の松本市です。風光明媚で四季の移り変わりがはっきりと感じられ、ゆっくりとした時の流れの中、日々生活していました。

私が初めて松本に移り住んだのは8月の初旬で、陽射しは強いけれど木陰に入ると涼しく、窓を開けていればエアコンは必要なく、小高い山へ続く途中のマンションからの景色は最高で、ベランダから松本城、もう一方からは山と川の流れを見ることができ、何とも言えぬ幸せな気持ちになりました。

8月には大きなお祭りがあり、市街地を踊り歩く人々を見物する日本人や外国人の観光客で溢れ、普段静かな街が急に人口が増え賑やかになります。

秋になると山々は紅葉し11月の市民祭には松本城が開放され、茶道を楽しんだり、夕方になると松明に火が点き薪能が催され、松本城をバックに行われる薪能はとても幻想的でした。

冬には気温がマイナス10度以下になる時もあり、空気中の水分が凍り、キラキラ輝く事がありとても綺麗です。松本はそ

れ程雪が多く降る訳ではなく、積もるのは1月に入ってからが殆どです。ひとたび雪が降り始めると東京と違い、1時間もしないうちに30センチ位積もってしまいます。夜中に雪が降ると、朝6時にマンションの理事から電話があり、住居人は一斉に外に出て雪掻きをします。私は初めての経験だったので、その雪掻きも新鮮で楽しいものでした。

北アルプスの山並みは、冬の季節が最もはっきり見えます。雪を頂いて連なる乗鞍岳から白馬岳は素晴らしい風景です。

子供の通っていた学校は開智小学校と言って、松本城と並んで国法に定められていて、現在の校舎の向い側に明治時代の校舎があり、観光客が多く見学に来ます。その為という訳ではないでしょうが、生徒達は毎日学校の外周りまで掃除します。これも街を綺麗にしようという市民の意識が感じられます。

春になると雪が溶け桜、桃、水仙等々の花が一斉に咲き出します。

家の前から小高い山にかけ桜並木が続き、桜のトンネルができます。窓の外はピンク一色になり、なんとも言えぬ美しさでした。

このような四季を過ごし情緒が養われ、のんびりした中にも変化のある生活を送る事ができ、僅か3年しか住むことができなかったけれど、私の人生で一番倖せな時間でした。（横浜教室・ボランティア）

# 私とユッカの会

山田 和子

今年3月、私は主人の転勤にともない、12年間住んだ茨城県古河市から横浜市中区の野毛町に引っ越してきました。以前（といっても、もう20年近く前になりますが）、結婚、出産、子育てと忙しい時期を旭区の二俣川で6～7年過ごしたので、引越し当初は、懐かしい横浜に戻ってきたという感慨と嬉しい気持ちでいっぱいでした。

引越しによる家の中の整理も終え、生活も落ち着き、横浜の見どころも一通り巡ったころ、人とのつながりや自分に今できる“何か”を探し始め、インターネット上でユッカの会を見つけました。

その後、9月に横浜駅近くの「かながわ県民センター」を訪ね、実際に一対一での日本語ボランティア（日本語指導・支援）をみさせてもらい、全くの日本語初心者では無理だが、ある程度の日本語を聞き取り、話す人への支援は私にでもできそうだと感じ『ユッカの会』でのボランティア（週1回）を始めました。

まだ2ヶ月しか経っていませんが、日本語を教えながら、日本語の文法（組み立て、語順、言い回し、等）を再認識したり、

その伝え方の（納得し理解してもらう）難しさに苦戦しながらも、自分自身の勉強になると思い楽しんでやっています。また、以前少し学んだ中国語を逆に教わることも多く、その学び直しの嬉しさも味わっています。

わたくしごとですが、生きていれば90歳を越す私の父は、祖父の仕事（満州鉄道の技師）の関係で大連で生まれ、育ち、3歳の時日本に戻ってきたという経緯があります。大正時代のことですが、それから中国と日本の間には、色々な重い歴史が流れました。奇しくも、私のボランティアの相手の方は大連出身で、廻り合わせの妙、不思議な縁を感じています。父の、いつか大連（かすかな記憶しかないけれど）を訪れたいという想い、生きているうちに果たせなかった夢が、今、私にのり移ってきています。近いうち必ず大連の地を踏もうと思っています。

『ユッカの会』で県民センターに週1通い、10階のフロアーで活動している様々なボランティアグループをみると、自分のできる範囲で社会と繋がり、役に立てたらいいなという想いを強くします。『会』の方々とお会いする機会は、あまりないようですが、横浜に住む間は続けるつもりですので、よろしくお願いします。（横浜教室・ボランティア）

# 中国「竹の郷」での日本語教師

加納 正三

ユッカの会の案内にあった日本語教師募集に応じて今年9月こちらに来て何とか3ヶ月たちました。こちらとは湖州安吉県、杭州の中心からバスで2時間、上海から4－5時間ほどのところにある小さな町です。

周りを山に囲まれ、又至る所竹が生えている自然に恵まれたところです。学校の周りは経済開発区で事務用椅子の工場が立ち並んでいて、町へ出るのに自転車で10分くらいと一寸不便なところに学校と宿舎があります。

3年制の私立大学です。大学の隣に外国語を主とする付属高校があります。大学は英語科と日本語科が主で、高校は英語、日本語のほかにドイツ語、韓国語があり、大学では400人くらい、高校では第一外国語、第二外国語を含め2,000人くらいが日本語を習っています。大学の外人教師は日本人私一人と米国人一人だけですが、高校には日本人を含め大勢の外国人教師が居ます。小生は大学の2年生と3年生の10組250人ほどの会話と作文を担当しています。

勉強しない学生が多く、授業は大変と

日本を出発する前に聞いていたので特にびっくりすることはありませんでした。優秀な生徒やまじめな生徒ももちろん居ますが、雑談、携帯電話でメール、居眠りといった生徒も結構居て、最初の一ヶ月はみんなを授業に参加させるように比較的易しい内容にし、かつ学生に緊張感を持たせ、わりと皆も小生も楽しく授業を進めてきました。しかし3年も日本語専門で勉強してきて（？）ひらがなを読むのがやっとという学生もいるし、ましてや会話なんかとんでもないという学生も。でもまじめで優秀な学生たちを犠牲にするのはまずいと思い、授業のレベルを上げてきました、するととたんに授業の雰囲気が悪くなる。学生のレベル差が大きすぎる。

仕方がない。今は授業の始めにやさしい日本語と中国語でみんなと楽しい話を少しして後は、勉強しない学生は無視。うるさくなったらどなって静かにさせる（滅多にしませんが）。一度怒ると次からは雰囲気がよくなる。余り生徒にやさしいばかりも駄目なようです。学生が授業にのってくるときはこちらも楽しいですが、学生がのらないとこちらもがくっと疲れます。

とは言いながらも、学生と接していると大勢が慕ってくれて楽しいといえるかな？

それと宿舎にいると昼休み、夕食休みに高校生や大学生が部屋に遊びに来て日本語の会話を楽しんでいきます。こちらの学生は何か子供っぽく見え、高校生は日本の中学生みたいで本当に可愛い。部屋に来る彼らは大抵熱心に勉強する子供たちで話をしていても楽しい。

時々彼ら、彼女らは料理を作ってくれる。男の子もよく料理をつくる。写真は一人の女子の大学生が何故か彼女の誕生日だということで誕生ケーキを持ってきて、学生

たちが料理を作ってくれた時の様子です。

最近はよく部屋に遊びに来る学生が大学にクラブ活動として日本語愛好者協会をつくり、英語科の学生も含め120人くらいの会員が集まったそうです。小生もなんとかこのような活動を彼らと一緒に盛り上げていきたいな等々いやなことと楽しいことが入り混じってなんとも興味ある生活をしています。（横浜教室・ボランティア）

# 今、ここに在ること

増田 里子

対岸右手に千葉を、左手に

横浜を、中央に海ほたるを望み、大小の船舶が往き交う浦賀水道が見渡せる岡の中腹に我が家が在ります。穏やかな初冬の湾に時としてキティホークが不気味なシルエットを残して通り過ぎるのです。何時の間にか横須賀が原子力空母の基地になろうとしていて、何らかの戦争へ巻き込まれる危惧を感じます。

思えば日本が戦争への足音が次第に高くなって来た昭和12年横浜に生まれました。2年後の昭和14年12月には太平洋戦争へと突入し、アメリカの広島、長崎への原爆投下の末に、終戦を迎える昭和20年迄、私の幼少期は、戦争の真っ只中にありました。物資も次第になくなり、硬いボール紙で出来た筆箱、ランドセルを背負い学校へ通っていましたが、戦争、空爆も激しくなり、老人や子供は親類縁者の居る人は縁故疎開、居ない人は集団疎開として親元を離れ、散って行きました。

私も長野の天竜川近くの母方の田舎へ祖父と共に行く事になっておりましたが、折悪しく体調を崩し、空襲が激しくなる中、空地に掘った防空壕に寝ておりました。突然空襲警報のサイレンが鳴り、5月の空一面が真っ黒になり、B29から雨の様に焼夷弾が降り注ぐ中、大切なリュックを背負い、防空壕の入り口の目張りのために残った父母と離れ、隣組の人々と共に火の手を逃れて海岸へと走りました。昼なのに暗闇の中、あちらこちらで火の手があがり、幸い引き潮であった海岸へと。胸の辺りまで海水に浸ったり、小舟の陰に身を潜めたり、遅れて来た父母とも再会し、容赦なく続く機銃掃射の銃弾から幼い私に覆い被さり、身を以って守ってくれた父の温もりを、今も有り難さを伴って鮮明に思い起こします。

町は黒煙を伴って燃え盛り、総てが灰塵となりました。B29が去って後、一時小学校へ避難しましたが、幸い防空壕は焼けずに残っており、まだ火の燻っている町を通り抜け、焼け野原の中の防空壕へ戻りました。幸い私達は傷一つ負わず生き延びましたが、多くの犠牲者が出ました。近くのお寺で亡くなられた方々の御遺体を焼く灰色の煙も私には暗い夢の中の出来事のようでした。進駐軍が上陸しては危険だからと母と二人傷ついた人々を乗せた満員の列車にかろうじて窓から引き上げられ、何とか長野へと辿り着きました。

父や母と離れ田舎の農家で他人と共にの生活には都会生活に慣れた私には馴染めず、毎日登校拒否の状態でした。治安も少し安定してきて父母が迎えに来て、父が建てたバラックでの不自由な生活が始まりました。学校に戻り、既に3年生になっていました。庭一杯に様々な野菜や果物の木を植え、食べる物、着る物も充分にない生活でしたが父母と共に在り、幸せだ

ったと思います。

連日新聞、テレビで親が子を、子が親を殺す、又小学生、中学生、高校生の「いじめ」に依る自殺等等を見聞き致します。希望に満ちているべき少年、少女が自らの命を断つと言う誠に残酷な出来事は、日本ばかりでなく、韓国でも同様の事件が多いらしく、国自体も色々な対策を打っていると聞きます。しかし我が国では、お互いに責任を負おうとしない我が国の教育者、大人達、そして安易に充分な議論もなされず、国会での教育基本法改正案の強行採決と、片や少子化対策だと叫ぶこの国の政治家の無責任な厚顔さを見ていると腹立たしくなります。核、非拡散条約の批准も一向に進まず、北朝鮮、イラン等核保有国への参入、唯一原爆被爆国である日本に於いて、平然と核保有の議論の必要性を公言する政治家も居り、何世代にも渡り人類に必ずや禍根を残す恐ろしい核戦争へと、今私達は重要なターニングポイントに立たされているようです。

2年余り体調を崩してボラティア活動を休止しておりましたが、又皆様と共に少しでもお役に立てればと考え活動を再開しました。以前一緒に学んだ上海からの蒋宛娥さん、彼女のお嬢さんも優秀な高校生になられ、上海に離れて生活していた下の子供さんも引き取られ、親子4人元気で暮らしておられます。お義母様の故郷日本に、中国生まれのご主人共々日本に来て、今は5歳になった元気な男のお子さんを生み、育てているルメイさん、一年前に女のお子さんを授かった黄淼淼さん等々懐かしい人達です。

若い人達に接し、人と人との触れ合いの大切さを、命に尊さを思い到りながら、古希の祝いを迎えた私は、若い時精一杯でしたが、今は少し肩の力を抜いて、“今ここに在る”ことの大切さを噛みしめています。（横浜教室・ボランティア）

## 難しい日本語の敬語

員 琳蓉

日本語の敬語は難しいと言われていますが、職場ではその本格的な使い方の難しさを味わいました。

ある日、仕事のやり方を変えていく過程で、部長から出された家内作業者への通達文を巡って、プロジェクト全員が意見を出しながら、直しました。最初の部分は、秋の天気の挨拶なので、議論はなくそのまま残されましたが、大切な部分はほとんど直しました。大体の内容は、元請から当社に対して、厳しく問われている問題に対してで、「納品したファイルのうち30～40%が要再修正として、戻ってきています。これから、家内作業者に戻ってきたもの

を再度やり直して頂きたく、一から修正をお願い申し上げます。ところで、ミスが出たことは、何といっても、元請にも当社にも望ましいことではないことです。」というものでした。手紙の言葉の硬さと柔らかさ、めりはり、更には失礼なことがないかどうか、それについて、尊敬語と謙譲語をよく考えながら、プロジェクトの皆さんたちは1時間ぐらいかけて、その手紙に慎重に取り組んでいました。途中笑い話もありましたが、確かに日本語の敬語は、日本人にとっても難しいですね！「貞さんなら、何と書く？」と同僚から、聞かれたので、「外国人だから、何とも言えないです」と答えておきました。

中国では、このぐらいのことは、一人のオフィススタッフの簡単な仕事ではないでしょうか。日本語の言葉遣いのことで、日本人は人間関係を大事にしていることがよく分かりました。中国には、「天時、地利、人和」という俗語がありますが、現在、この考え方はだんだん適応され難くなってきました。お金を受け取る方も、自分の気持ちだけで考え、相手のことを配慮しなくなってきているのです。中国の儒教の精神は、日本人に伝えられ、しっかり継承されているのに、肝心の中国の自分自身の未来は、どんな基本思想で導かれていくのでしょうか。(横浜教室・学習者)

# 日本に来た感想

郑 杨涛

私は日本に来てから、だいたい3年になりました。日本の生活にも、だいぶなれました。日本に来て感じたことは、たくさんあります。

日本の天候がよいこと、春・夏・秋・冬の四季の変化がはっきりとしており、自然は四つの顔を見せてくれます。桜の花は春の代表的な花で日本の国花でもあります。とても美しいです。桜の花は盛りが短いですから、満開の時にはおおぜいの人が花見に行きます。

日本の電子工学はとても進歩しています。工場ではたくさんのロボットが単純な仕事を人間の代わりにしているのです。日本人が仕事をする時は一生懸命働いてとてもすごいと思います。

日本に来て、本場の日本料理の味が分かるようになった自分は幸せだと思います。私は日本料理が大好きで、何でも食べられます。刺身が大好き、納豆も好きです。和食ではたくさんのお皿を使うけれども、量は少ないと思います。きれいなお皿の上に料理を丁寧にのせて、料理は味わうだけではなく、目で楽しむものでもあるようです

日本は世界で平均寿命が一番長いので、食文化について知りたいという願望もありました。日本の食文化には世界の国々が注目していて、日本料理は美味しくて健康に良いと言われています。(横浜教室・学習者)

## 日本の四季に思う

楊 雅婷

私は日本に来て二年になります。現在横浜で暮らしています。横浜は日本に来る前から知っていましたが、中華街のイメージしかありませんでした。横浜で暮らしてみて始めて国際的な都市だと感じました。

二年の間にいろいろな所を見物しましたが、忘れてしまった風景もあります。最近、主人が写真にはまっているので、でかけるたびに行ったときの事を思い出します。

日本は台湾より四季がはっきり分かれています。春は桜がとても綺麗でいろんな所でお花見をしました。夏は富士山に主人と一緒に登りました。秋は紅葉を見るために志賀高原や京都へも行きました。台湾の冬はほとんど雪を見ることがありません。そのため、日本で雪が降るのを見るとうれしくなります。

これからも主人について、いろいろな所を見て周り、もっと日本の景色を楽しみたいです。(横浜教室・学習者)

## 楽しいバス旅行

田 璐

バス旅行の前日、いろいろと準備をしながら明日は何をしようかと思いました。布団には入ってから、いろいろ考えて眠れなかったです。

私達は旅行に行くので、早く起きようと何回も言っていたのに朝っぱらから寝坊して、時間ギリギリに集合場所に来ました。みんなは「今日はいい天気ですね。雨が降らないでよかった」ずっとこればかり言っていました。前日は雨が降りひどい天気だったのです。

先生達の話も終わり、みんなでバスに乗りました。私は初めて乗ったので楽しかったです。後ろに董さんと彼女の主人も乗っていました。董さんもまだ眠りたいらしい様子でした。

行きのバスはみんなの話し声で、とても

賑やかでした。最初は市原房総十字園に着きました。みかんの木がたくさん有りました。案内員はみかん狩りの仕方を教えてくれてから、みんなは園内に入りました。食べ放題なので私達は話しながら思う存分食べました。私の印象に残っているのは、みんなが案内員のとおりに、木からみかんを捩ぎ取って甘いみかんを取ると隣の人と一緒に分け合って食べていたことです。いろいろな姿を写真に撮ってとっても楽しかったです。

昼御飯をたべてから養老渓谷へ行きました。これは有名な滝です。紅葉が綺麗だと聞いていましたがその時は紅葉にはまだ早くて見られませんでした。でも、みんなは綺麗な景色のところで岩から水が流れる声を聞きながら写真を撮りました。

養老渓谷から出発する時、空がだんだん暗くなりました。海ほたるに到着すると真っ暗になっていて、さらに風が強く吹いて、たくさんの人がバスの中に残っていました。私と主人は屋上に行きました。屋上から美しい夜景を見ることができて、嬉しかったです。そして、海の周りに行きました。私の髪は風に吹かれて視界を遮られて大変なのに、楽しく感じました。風が冷たいから20分ぐらいでバスに戻りました。途中で熱いお茶を買って飲んだら体がすぐ温かくなりました。

7時頃に最初の出発場所に戻りました。ちょっと疲れましたが今日は一日中楽しく過ごすことができました。今日は皆さんと一緒に楽しい時を過ごすことが出来て、人生の美しい思い出になると思います。
(戸塚教室・学習者)

# 姉

劉 震萍

私は小さい時、両親が忙しかったので、お姉さんが何時も私の世話をしてくれました。私とお姉さんの関係は本当に深いものでした。今でもその間家は変わらないのです。

私は2004年5月日本に来て、今年で丁度2年になりました。今では日本の生活習慣や食文化にも少しずつ慣れてきました。

私は日本に来たばかりの時、家事や炊事のことが全然分からず、その上、日本語もあまり上手でなく、“どうしよう、どうすればいい”と悩みました。そんな時は、お姉さんに電話をして色々尋ねました。お姉さんは丁寧に詳しく教えてくれました。

お姉さんのお陰で、今では肉饅や饅頭も作るようになりました。肉饅は私の作る食べ物の中で、一番評判のいい物です。時々は、夫の両親にもお土産として差し上げ、喜ばれています。

お姉さんは、今大連で主人、高校生の娘と3人で生活していて、同じマンションに住んでいる父母の食事等々日常の生活の世話をしてくれています。私はお姉さんに申し訳なく、只感謝の気持ちで一杯です。今度、大連に帰る時には、出来るだけお姉さんに恩返しをしたいと思います。今、私が色々なことが出来るようになったのは、夫とお姉さんの援助のお陰だと思っています。(横浜教室・学習者)

# 小学校英語必修化の是非

木崎 治恵

昨今、小学校で英語を必修化させることが推進されている。私はこれについて全面的には賛同できない。小学校での英語学習を推進する主張は、主にこれらである。

現在は国際化が進んでおり、今後一層英語の需要は増える。

語学の学習は早い方がよい。

常にこのようなことが言われているが、それに対して私は幾分異議がある。

先ず、前者の主張だが、「国際化の世の中」に対応するために学ぶべきことは英語だけではないはずだ。

少し前に、高等学校などで科目の未履修が発覚し話題になったが、小学校で英語が必修化されれば、必然的にどれか他の教科を削らなくてはならない。

「ゆとり教育」が失敗だったのでは、とその見直しが求められている中、これ以上教科の履修を削減すればどうなるか。「国際化に対応するため」という名目で、英語をカリキュラムの中に割り入れ、他の教科を犠牲にする。これは本末転倒ではないか。

小学生の時期、さまざまな教養を積んで磨いた人格。これこそ「国際化に対応」できる子たちでないだろうか。真の国際化とは、英語だけペラペラできる人のことではない。

そして後者の主張「英語学習は早いほどよい」というもの。

10歳から13歳ぐらいまでを「臨界期」といい、この時期内に語学学習をするべきで、時期を逃すと顕著に習得が困難になるというのが世の一般論なのだろう。参考文献、鳥飼玖美子氏「危うし！ 小学校英語」(鳥飼氏も小学校英語には反対で、私は同氏の著書を大いに参考にさせていただいた)。

要するに、中学校入学時の12歳、13歳は「臨界期」のギリギリなので、英語学習開始をもう少し繰り上げるというのが、小学校英語必修化の背景らしい。しかし、その「臨界期」というのも決定的な確証はない。

確かに、人間は加齢と共に記憶力などは徐々に衰えていく（もっとも、この説を否定する学者もいる）。しかし、「臨界期」を過ぎた後にも語学学習を始め、見事に習得した人を私は何人も知っている。「ユッカの会」にも様々な年代の人が学習しに来ている。「臨界期」を過ぎたら語学学習は不可能と断言するその説は、その人たちに対してあまりに失礼でないか。

「臨界期説」は極論と言わざるを得ない。数年間で人の語学力が決定してしまうなど、私は信じたくない。そして、それでもどうしても小学校英語導入を推進するのならば、学習者たちに英語を学ぶ意義や目的を明確に示してほしい。

私は中学生の時にある先生に言われた言葉を忘れることができない。

君たちは義務教育の中で英語を勉強する。何故かな。英語は世界の最も広い範囲で使われていて、母国語ではないけれど英語も分かるという人たちも（インドなどのことであろう）含めれば、英語を使う人はとても多い数となる。何故英語が世界に広まったかは徐々に勉強して分かるようになってくれ。日本の文部省（当時）は、中学校で全員が英語を勉強すると決めている。だけど、忘れないで。君たちは英語を勉強するが、中国語やアラビア語は学校ではやらない。しかし、それは中国語などが英語より下であるとか、そういうことでは決してない。」

子どもの英語学習が商業主義に一人歩きしてしまっている状態の昨今だが、一度原点に戻り、小学校で英語を始めるのは何のためか、もう一度考えてみるべきであろうと思われる。（横浜教室・ボランティア）

# 手芸教室（1）

木島 比梠子

11月16日、教室に入ると沢山の笑顔で迎えられました。今回は2度目だったのですが生徒さんの期待に満ちた笑顔を見ると、いつも教えられる側ばかりの私はちょっと責任を感じて緊張しました。

毛糸と針が配られ帽子つくりがスタートしましたが、初めてカギ針を持つ方もいらして、グループ全員の手元を見て回るのは大変な作業でした。

中にはお友達の面倒を見て、通訳しなが

ら手際よくどんどん編み進める方もあり、目数を数えて手を動かし段数を数える嬉しそうな顔をみると少しは力になれたのかしらと、幸せに感じました。

出来上がった帽子を被って、この冬を健康に過ごして下さいね。(手芸講師)

# 手芸教室（2）

鷲尾 多恵子

高校時代のクラスメートの飯田さんがユッカの会のメンバーでいらっしゃることは以前から知っておりました。その会で毛糸の帽子をつくる講習会の講師を頼まれました。この会は中国帰国子女の方々を支援するボランティアの会だそうです。

生徒の皆さんの会話は全て中国語、何か不思議な光景でした。外国人に教えている感じでした。日本語を理解出来ない人はお仲間同志中国語で説明していました。日本人の子供として生まれ乍ら敗戦の犠牲者として過酷な運命に翻弄されて育った彼女達に身近に接し何と表現して良いか理解出来ませんでした。

彼女達はお仲間同志ではみな明るく楽しそうに過ごしている様子でしたが、テレビ等で放送されている様子では私達も同じですが、決して安心して生活できる将来が待っているとは思えません。

ユッカの会も多くのメンバーが彼らを支え、また国も当然手を差し伸べて彼らが一日も早く安定した生活をしていかれるよう願っております。今後私もささやかなお手伝いでも出来ればと思っております。(手芸講師)

# 日本語について思ったこと

新井 アルマ

私はフィリピンから来ました。ビサヤ語とタガログ語と英語をつかっていました。日本語をべんきょうして、はんたいだな と思ったことがあります。

「えいがに行かないでしょ？」と聞かれたとき、日本語では「はい」と言ったら「はい、行きません。」という いみです。「いいえ」と言ったら「いいえ行きます。」という いみです。英語、タガログ語などは「はい」と言ったら「はい、行きます。」で「いいえ」だったら「いいえ、行きません。」の いみです。なんだか はんたいの気がしますが、今では わかります。

でも、「えいがに行かない？」と聞かれたとき「はい」と言ったら「はい、行きます。」という いみで、「いいえ」と言ったら、「いいえ、行きません。」のいみです。「でしょ。」が あると ないで いみが はんたいになります。さいしょは さっぱりわかりませんでした。

また、英語では verb（どうし）は はじめのほうに でてきますが、日本語では さいごのほうなので わかりにくいです。たとえば、英語では「I study Japanese」で、日本語では「私は日本語をべんきょうします」と なります。

そのほか 日本語が むずかしいと思ったことですが、「if」は 「もし～だったら」や「もし～なら」とか いろいろな言い方があるので とても わかりにくかったです。日本語を ずっと べんきょうしているので 今では だいたい わかるように なりました。

ことば以外でも たとえば バレンタインデーのプレゼントの わたしかたも はんたいなので とても おどろきました。日本では 女性から男性へ チョコレートを つくったりして プレゼントをわたしますが、フィリピンでは ふつうは 男性から女性にプレゼントを わたします。ときどき プレゼントこうかんするときもあります。ホワイトデーが あることも びっくりしました。

これからも もっと 日本語がうまくなりたいので がんばります。(戸塚教室・学習者)

# 大好きな演歌

青木 きん

小さい頃、おばあちゃんは働きながらよく歌を歌っていました。何の曲か分からなかったけれど、歌うおばあちゃんの笑顔を見て嬉しかったものです。「演歌、演歌だよ。」おばあちゃんは、そう言っていました。幼い頃聞いた演歌がその後自然に好きになっていきました。

父から日本について、色々聞いていたものの、結婚での来日後、いざ生活するとなると、言葉の問題をはじめ不安もありました。が、新たな人生に夢と希望でいっぱいでした。

日本に来て、右も左も分からない私にとって、おばあちゃんの心にあった演歌が支えとなりました。歌手のなかでは伍代夏子が大好きです。カラオケに行けば必ず彼女の“つづら坂”を歌います。

文化や肌の色や言葉が違っていても、演歌は人の心の中に染みてきます。言葉が分からなくても心に訴えかけるのです。

今思えば、私が日本にすぐなじめたのも演歌という、共通の音楽を通じて壁を

感じず、人とうちとけられたからでしょう。ありがたいことだと思います。（横浜教室・学習者）

## 男女の役割

焦 程敏

「男性は男性らしく、女性は女性らしくしなければならない。つまり、人間は初めから男性の役割、女性の役割が決まっている。」という意見があります。子供を産むことや、赤ちゃんを育てることは全部女性の役割です。ですから、女性は必ず家にいて、子供を育てながら家事をします。そして、一般的な家庭では、子供は一人だけではなくて、２、３人くらいいます。結婚している女性は、子供のために、家庭のために、家事をしなければなりません。一方で男性は外で仕事をして給料をもらい、全部家庭の生活費にします。男女の役割は人間の初めから決まっています。

昔、中国の主婦は、人生で一番大切なものはご主人でした。ご主人の命令には絶対に従わなければなりません。昔の男性は外で働き、家に帰れば家事には手を出しませんでした。掃除や料理や洗濯などという家事は、昔の男性には無関係でした。それは「男主外、女主内」と言われています。

今、中国の女性はだんだん自立してきています。職場で女性は給料が男性と大体同じだし、男女は同じ能力であったら、昇進の機会も同じに与えられます。もし結婚したら、家事も家賃も男性と女性で分担します。現在では、電化製品の進歩につれて、家事はだんだん簡略化されてきています。家事をする時間が少なくなって、女性は仕事と家庭を両立できます。男女の役割が初めから、決まっているけれども、今変化が少し起こっています。

実際に女性は「子供を産む」という点で男性と違いがありますが、これは生理的な面に過ぎません。精神的な面では男女の違いがありません。「男性は男性らしく、女性は女性らしく」という言葉は、男性中心社会の考え方にほかならないからです。（横浜教室・学習者）

## 私の故郷

古高 正子

私の故郷は九州佐賀県伊万里市です。伊万里市の人口は6万人です。伊万里市の地勢は平坦です。南西は海で、東は山です。伊万里市は静かで美しい町です。

私は1987年、家族5人連れて日本の故郷伊万里市に帰りました。お母さんと二番目のお兄さんと妹と親戚と、みんなで迎えてくれました。楽しかったです。

伊万里市は日本の有名な陶磁器の町です。五、六百年の歴史があります。ある日、伊万里市役所の人が私たち家族みんなを連れて古い窯跡の遺跡を案内してくれました。四百年前に中国人の許さんがここで磁器を作りました。私は娘と友達と一緒に皿を作りました。皿の上に五星紅旗の絵を描きました。その後で自分の名前を書きました。その皿を今も使っています。いい記念品となっています。

それから伊万里市の陶磁器商店を参観しました。いろんな陶磁器がたくさんありました。楽しかったです。

私は今、横浜市に住んでいます。お母さんは88歳で伊万里市に住んでいます。（横浜教室・学習者）

# 美しい故郷——吉林

吉森 鳳子

私の故郷は吉林です。そこには豊かで美しい長白山があり、遙か遠くから流れてくる松花江があり、そのほか魅力的な長白山天池があります。山上には緑の野草が生え、松花江の中には汚染されない魚が泳いでいます。

春は山の上にわらび、四葉菜、広東菜、翅老牙などいろんな野草が生えます。-

夏はあたり一面に花が咲き、それぞれ異なった香りをただよわせ、いつまで見ていても見飽きることがありません。

秋は収穫の季節で、山には珍磨、松磨、灰磨、凍磨など、多くの種類のきのこが生えます。また樹上には山葡萄、山梨、山里紅、きゅうい、松の実など、たくさんの果実が熟します。

冬になると、町も村も雪で真っ白になり、松花江は凍って、河の上で子供たちがスケートやこま回し、雪だるま作りなどしているのを見かけます。大人は氷に穴をあけて魚を釣ります。

私の故郷吉林は本当に美しい。（横浜教室・学習者）

# 日本女性の優しさ

廖 忠

沙扬娜拉

最是那一低头的温柔/

像一朵水莲花不胜凉风的娇羞/

道一声珍重/道一声珍重/

那一声珍重里有甜蜜的忧愁/

沙扬娜拉

これは中国の詩人徐志摩の名作で、女性の優しさを表した詩である。徐志摩（1897～1931年）は既に故人であるが中国の非常に有名な詩人だ。日本に留学したこともある。この詩には日本の女性の優しさ、美しさに憧れて、ある女性の対する愛着が溢れているようだ。

確かに日本の女性の穏やかな顔、微笑み、正しい礼儀、エレガントな振る舞いは人々に強い印象を与える

日本に来たばかりの時、町でベビーカーを押しながら歩いているお母さんたちの姿が一番好きだった。緑に囲まれている道に時々子供を連れているお母さんたちが見られる。たいてい一人っ子ではなく、もう一人背中に負んぶしたり、ベビーカーの周りに跳んだりはねたりしている子がいる。この風景は中国ではもうなくなってしまった。初めて見た時は、不思議で懐かしい感じがした。お母さんは焦らずに、ゆっくりとベビーカーを押しながら、子供に話し掛ける。「この花は綺麗だね。走らないで、ゆっくり歩いてね」とやさしい声で繰り返し言っていた。楽しそうに子育てしている。その様子を見て、ごく自然に、女性の本能が表れているように感じた。女性の原点はお母さんだと突然分かった。この楽しさは長い間味わう事が無かった。

教育のせいか、中国の女性は女性である事をあまり考えないようだ。男女平等の社会で一人の人間として育てられている。女性、男性を問わず皆同じだ。一緒に教育を受け、一緒に仕事をし、能力があれば、だれでも出世ができる。だから、一所懸命働いて、自分が男性に負けないように努力している。しかし、知らないうちに、女性らしさがなくなってしまった。結婚したいが、家事をやりたくない、子供がほしいが、育てたくないという女性が少なくないようだ。母と妻両方の務めは果たしたくないようだ。

日本に有名な番組「徹子の部屋」にゲストとして招かれた阿木曜子という人で、彼女は実年齢よりずっと若く見える。すごく綺麗で優雅な女性だ。才能に恵まれているから、いろいろな分野で活躍している。こんなに立派な女性がなんと毎朝六時半に起きて、ご主人に心のこもった朝ご飯を用意する。ご主人に愛情をいっぱい持っているのかな？ 一年間同じメーニュは繰り返さないと言う。ご主人は食べたくなくてもそれに応えて食べる。お互いの思いやりに感心せずにはいられない。

男は山のよう、女は水のようと言う諺が有る。平等は平等だけど、やはり男女は違う。女性は自分の母親、妻としての務めはつねに自覚しているはずだし、この務めには優しさも含まれているはずだ。

（横浜教室・学習者）

## 中国「縁起」の話

宮崎（趙）子貴

ご存知のように、日本人はよく“四（し）”を“よん”と読み、“九（く）”を“きゅう”と読みます。贈物は三万円、子供のお祝いの歳は三・五・七、俳句や川柳などの字数も

奇数できまります。病院でのお見舞い用の花は鉢花を使いません。大晦日、正月になると多くの人は神社、寺を回って祈ります。

では中国人はどうでしょうか。

「有縁」、「結縁」、「求神許願」、「抽籤算命」、「観風水」など、縁起と結ぶ言葉は日本人と同じようにたくさん使います。

中国語の四字熟語で言えば「躱災避難」、「逢凶化吉」、「求神許願」、「招財進宝」などがあります。

**「躱災避難」**（災難を避ける）

船旅の人が最も恐れるのは船の沈没です。陳という名前の人が乗船するとき、“沈”と“陳”は同じ発音“chen”なので、乗船するとき、“陳”という名前の人は乗船しません。

夫婦や家族で一緒に梨を食べるとき、切り分けて食べることはせず、各人が1個まるごと食べます。何故なら、“分梨”と“分離”は同じ発音“fen li”なので、夫婦や家族で一緒に梨を食べるとき、切り分けて食べることはせず、各人が1個まるごと食べます。何故なら、“分梨”と“分離”は同じ発音“fen li”なので、

EQ ¥* jc2 ¥* "Font:ＭＳ 明朝" ¥* hps10 ¥ o ¥ a d ( ¥ a s d ¥ (

老人に時計を贈るのもやめた方がいいです。「時計を送る」は中国語で「送鍾」となり、これは「送終」（人生の終結）と同じ発音“song zhong”になります。

“皿”は亡くなる“死”と同音ですから、お見舞いの際には使わない方がいいです。逆に、お見舞いの贈物には梨を使います。“梨”と“離”は同音で、病魔が体から早く離れるようにという意味になります。

**「逢凶化吉」**（凶を吉に転じる）

除夕夜（大晦日の夜）、家族が同じテーブルで“団年飯”を食べているとき、誰かが皿を落として割ったら、「盤子（皿）打碎了（割れてしまった！）」と言わず、黙って片付けます。これは“碎”と“歳”が同じ音“suèi”なので、歳（来年）をバラバラにしないようにという配慮からです。結婚式でもこのような場合は、「先開花、後結子」（先に花が咲き、それから実がみのる）とユーモアをこめて言います。（“碎片”は“花瓣”のようだから）

昔むかし、大晦日に食べ物がなくなった乞食が、頭をひねって妙策を考え出しました。山で柴（薪）を拾い、それを持ってお金持ちの豪邸の扉を叩きました。年飯中の主人が出てきて、汚い乞食を見て嫌な顔をしました。そこで乞食は、「我給✔送柴（財）来了」と言いました。柴と財は

EQ ¥* jc2 ¥* "Font:ＭＳ 明朝" ¥* hps10 ¥ o ¥ a d ( ¥

**「求神許願」**（神様に祈って願望を実現する）

歴史の長い中国では、仏教、道教、儒教を「三教」と言って、これに関係する四字熟語をよく使います。

「燒香拝佛」（線香に火をつけて佛様に祈る）、「求神保祐」（神様に頼み、財富と安全を護る）、「許願還願」（願望を神佛に頼み、実現したらお金などを寄付する）など。また「霊験」（願望を実現する）の「観音菩薩」、「関帝」（将軍、理財の関羽）、「土地神」（地蔵様、地方平安）、「馬祖」（海上平安）などに人気があります。

今でも儒教思想の影響は広く、現中国のスローガンである「建立和諧社会」（平等、協調、和平社会を造ろう）も儒教思想現代版といえます。

「算命」（占い）は手相占いなど、「抽籤」（くじ引き）では吉籤にあたって「喜結良縁」、凶籤にあたって「逢凶化吉、後有大福」など、「看風水」（家屋、墓などの方位選び）では「依山傍水」（うしろに青い山、前にきれいな水）、「坐北朝南」（南に向き陽当たりがいい）、「発家致富」、「子孫繁栄」などがあります。

「前人栽樹、後人乗凉」、「前世結縁、後世享福」などを座右銘にしている人も大勢います。

**「招財進宝」**（財富と幸福を招く）

日本人は招き猫、中国人は招財童子や進宝郎君で財宝を招きます。中国では春節になると招財、除魔などの画を扉に貼り（門神、門画）、扉両側の柱に対聯（一対）、扉上側に横批（一条）を貼ります。“福”の字を逆さにして貼ると「福倒（到）了」となり、「福が来ました」という意味になります。

結婚式でも「千里姻縁一線牽」（遠く離れていた二人が結ばれた）、「有縁分」、「前世姻縁」、「花好月圓」、「龍鳳呈祥」、「比翼双飛」、「早頭到老」などお祝いの言葉が多いほど盛り上がります。

誕生日を迎える老人には「松鶴延年」、「寿比南山」、「長命百歳」、「万寿無彊」などと言って長寿を祝います。

日本人は奇数が好きですが、中国人は二つ（一双、一対）、四つ・六つセットなどの偶数を好みます。これはバランス、役目、感覚的に偶数がいいものと考えるからです。

数字と漢字が同音のものもよく利用します。例えば、“八”と“発”（f´a、発はEQ ¥* jc2 ¥* "Font:ＭＳ 明朝" ¥* hps10 ¥o¥ad(¥s¥up 9(はっ),発)展、発達、発財などにEQ ¥* jc2 ¥* "Font:ＭＳ 明朝" ¥* hps10 ¥o¥ad(¥s¥up 9(はっ),発)以上いろいろ書きましたが、中国でも現代の忙しい人たちはそれほど気にしな

いようです。ですから、外国人は中国の縁起表現に、知ってはいても、あまりこだわる必要はないでしょう。(戸塚教室、学習者)

# 日本語教師にとっての日本人の言語行動

首藤 善弘

## 第１章 はじめに

このレポートでは、日本人の言語行動の特色について考察する。日本に住んでいる日本語学習者から、日本人の生活行動様式について質問されることが多い。そのうちでも言語行動について聞かれることが多いのは、彼らの日本語についての関心が高いためだろう。日本という異文化に接触して少なからずカルチャーショックを感じている学習者に対して、言語行動背景にある日本人の共通理解や文化について説明することは、日本語教師にとって必要なことである。この観点から、日本人の言語行動を理解することは不可欠である。

## 第２章 共存意識

日本語には共通の理解を期待する表現がよく使われるが、会話で最も端的に親しみを示すものに終助詞の「ね」がある。

—ずいぶん寒くなりましたね。

のあいさつに対しては自然な形で、

—そうですね。もうすぐ師走ですからね。

というような共通の感情を期待する共存意識の表現である。この場合、「ね」を取ってしまってはあいさつにならない。

これに対して「よ」という表現もあるが、外国人のための日本語教科書には「ね」と「よ」の説明があるのが普通である。「ね」は相手に同感を表したり、同感を期待したりするもの、「よ」は相手にかまわず自己の意見を主張するもの、という説明が一般的である。この説明により、「ね」はいつ使っても安全であり、「よ」はあぶないらしいから使わないようにしている学習者を見かける。

しかし、学習者はこの「ね」を単に話の調子を親しみやすくするためのもので、相手との共存的な意識の反映を知らずに、「ね」を乱用するケースがある。「娘が大学に入りましたね。」のように自分しか知らないことを相手に押し付ける場合がある。

そのほかの共存意識の表現としては、補助動詞の「てくる」「ていく」など、さらに「先日は…」や「お互いさま」のような決まり文句などがこまめに行われている。「てくる」と「ていく」は、話し手が聞き手と経験を共有したいという気持ちを

表す。また、日本人は「先日は大変ご馳走になりました。」などと、あいさつするが、学習者の国によっては、このような表現がもう一度ご馳走してほしいという督促にとられることがある。しかし、日本の慣習では、前回の出会いから今までよき人間関係が続いていることを確認したい気持ちがあることを学習者に理解させる必要があるだろう。

学習者から聞かれる日本語に対する印象の中に、省略が多いということがある。主語の省略はもとより、述語の省略については理解しづらいという意見を聞くことがある。

—今夜、飲みに行かない？

—今夜は、ちょっと先約が。

というような理由を述べると、その先の「ご一緒できません。」という断りのことばは言わなくても誘った人は理解する。こうした暗黙の理解があると、言いにくい断りのことばも言わずにすむが、この「言わずにすむ」ように仕向けるのは、聞き手側の「受け入れる態度」である。別の表現で言えば相手の言いたいことを「察する」コミュニケーションのやり方である。このように共通の理解を期待する関係では、むしろわかりきったことを述べ立てるほうが不適切で、日本ではいわゆる切り口上といわれる形式は好まれない。

## 第３章 相づち

日本人が個人的になごやかに話し合っている様子を見ると、実によく相づちを打っている。テンポのいい掛け合い漫才を見て心地よく感じるのは、単に面白いことを言っているからだけではなく、日常的な会話の上におかしさが溶け込んでいるためだろう。

—昨日、市役所に行きましたらね、

—ええ、ええ。

—偶然、昔の友達に出くわしましたよ。

—ほう、昔の友達に。

特に、文の途中で聞き手がさしはさむ短い語句については、私たちは普段、気がつかずにやっていることが多い。日本語学習者にとってこの高頻度の相づちは、「うるさい」と感じるらしく、疑問や不平を言われることがある。一つは、相づちが「あなたの言っていることを聞いていますよ。理解していますよ。」という意思表示であるため「はい」や「ええ」などの肯定的な表現が多いために起こる誤解である。このため、話の内容に対する賛成の意味にとられてしまい、後から確認したら実はそうではなく、だまされたような気持ちを持つことがある。もう一つは、私の日本語はへただからもうやめろという意味なのだととって、話すことをやめてしまうことがある。

では、なぜ日本人は頻繁に相づちを打つ

のだろうか。それは、「聞いていますよ」という合図がないと話しにくいのであり、日本人の個人的な場面での話し方はこの共同作業が基本になっている。アメリカ人との会話では、長い話になると途中で確認のブレイクを入れる場面が多い。

—So far OK？

—I am OK with you.

これは会話形式の違いからくるのであるが、頻繁な反応に慣れた日本人にとっては、落ち着かない気分になるものである。

話し手側の誘導により、聞き手側により相づちを打つ機会を与える方法に「こまぎれ文」がある。

—先生、今日のレポートの件なのですが。

—ん。

—実は、父が病気で入院していまして。

—それは大変だね。

—来週までに作成できるかどうか。

—そうだね。

—できましたら、もう1週間待っていただけないでしょうか。

特に人に何かお願いするときに相手が受諾をしやすくする状況を生成し、日本人の会話では控えめで丁寧な方法であると感じる。

これらは、相手との共同作業により会話を生成していく「共話」と呼ぶのがふさわしいと水谷信子氏が主張しているように、日本人の対話の一つの特徴であり、日本語学習者に誤解を与えないように説明する必要があろう。相づちを理解し、うなずきから少しずつ相手を受容する間接表現を使えるように指導すべきと考える。

## 第４章 受容表現

日本語の話し言葉の文末には、相手に対する配慮が表れる。

—佐藤さんは、いらっしゃいますか。

—はい、おりますけど…。

または、本人が出て

—はい、佐藤ですが…。

という会話の文末の「けど」と「が」は、日本語学習者にとっては逆説の表現であり、不在や間違いの指摘の言葉を予測してしまう。しかしこれらは逆説ではなく、相手の依頼や指示を待っているという、いわば受容の意思表現に使われているのであり、相手に対する配慮が根底にあってそれが形式化したものと考えられる。

—はい、おりますけど（呼んでまいりましょうか）。

—はい、佐藤ですが（何か御用でしょうか）

以上のとおり文をつなげてみれば、相互理解の前提の上で相手を受け入れて、話の方向の転換を示す機能を持つことがわかる。

受容表現が日本語学習者の誤解を招くことがある。「ちょっと」という表現は、「分量が少ない」という意味を持つが、「言いにくいことを示す」意味に用いることがある。

—ちょっと、それはできません。

という表現では、相手の言ったことを理解し受け入れた上で「ちょっと（言いにくいのですが）…」としているのであり、「できない」ことについては断言している。この「ちょっと」を程度の表現だと誤解して、やればできると解釈してしまう。英語でも同じような表現を見ることができる。

I am afraid to say but I cannot do that.

これは相手を傷つけないための配慮表現であり、そもそも言葉には現象面を客観的に述べるという機能のほかに、話し手の気持ちを表す機能があるということは、特に外国人に接するためでなくとも、知っておくべきことだろう。

## 第５章 配慮表現

日常の会話の中で、あいまいな数を使った表現をすることがある。

—あと3日ほど待ってもらえませんか。

なぜ3日間きっかりではなくて、「3日ほど」なのだろうか。これは、仮に貸した人が3日後に必要であった場合に、「2日しか待てない」という断りを言いやすくするための配慮表現であると解釈できる。英語でも、a few や some のような言い方はあるが、使用頻度は日本語の概数表現のほうが多いと思われる。このほかにも、

—1000円ばかり拝借したいのですが。
—1時間ぐらいしてから来てください。

などがあり、共通して概数を示して相手を追いつめない配慮を示している。

同じようにあいまいな表現で相手に対する配慮を示すものに、人を誘うときに使う「でも」がある。

—お茶でも飲みませんか。

この場合「でも」のかわりに「を」を使うのが日本語文法の基本であるが、なぜ「でも」が使われるのだろうか。英語では、tea or something like that であろうが、つまりお茶でない他のものを含めた幅のある表現で相手の選択を限定しないという配慮がある。

文末に接続の表現がくるとき、相手に対する配慮があらわれることがある。

—お茶がはいりましたけど…。
—お茶がはいりましたから…。

「から」は命令調で「来てください」を連想させるのに対して、「けど」は方向を転換して「どうしますか」と相手の意向を尋ねる機能を持っている。これは、逆に相手の懸念を払拭するときには、断定的に「から」を使うことで配慮になる場合がある。

—急に呼び出してすまないね。

—大丈夫です。家が近いですから。

と言えば、相手も安心することになる。

自動詞と他動詞の使い分けでも違いを表すことができる

—お茶がはいりましたけど…。

—お茶をいれましたけど…。

他動詞を使うと、動作者が前面に出ることになり、押し付けがましい言い方に聞こえることがある。「わたしが」という意味合いが強くなるのに対して、自動詞では動作者が前面にでないという違いになる。

これらの配慮表現は、敬意表現のうち「待遇表現」と呼ばれるもので、状況に応じて複数の表現を使い分ける方法であり、人間が本来的に持っている「押し付けられたくない、自由に行動したいという願望」を満たしてあげようとする態度である。これに対して「敬語」は、文法の変化によって敬意を表現する方法である。

## 第６章　「うち」と「そと」

日本語は「うち」と「そと」の区別の厳しい言語だと言われる。家では父や母に向かって丁寧な言葉を使っていても、第三者に父母について話すときは尊敬語を使わない。呼称についても、子供のころは「うちのお父さん」などと言っていたのが、一定の年齢に達すると「父」というようになる。特に、子供が親元を離れて大学に通い始めたり、あるいは会社に就職したりして「そと」の社会との接触がきっかけとなる。

社会に出ると、今までウチソトの境界線が家庭と社会の間のあったのが、場面に応じて複雑に変化することも日本語学習者を悩ませる。他社の人の前では自社の人は「うち」の範疇であり、境界線が会社間に引かれることになる。「山田部長」の敬称が「部長の山田」に変えなければならない。これは、個人が企業にどの程度帰属意識を持っているかにもより、それはまた社会の変化や多様化によっても変わってくる。

また、時代によりこのウチソトについての言葉の使い方も変化している。

—よしおちゃんにおやつをあげる。

これが自分の子供に対して用いられる場合、古い世代は自分の家族について表現するとき、呼称の上でもやりもらいの表現についても、厳しくしつけられてきた。

—よしおにおやつをやる。

やりもらい表現については、「あげる」はよその人であり、家族に対する授受行動をほかの人に言う場合は「やる」を使った。これは、父母などの尊属に対しても「母に見せてやる」のように使ったのであるが、最近ではこのように尊属に「やる」を使うことに抵抗を感じる人が多くなった。特に、

女性の話し言葉に象徴されるように、丁寧語の一般化が進行するにつれて「あげる」が人気を得て、「やる」が人気を失ったのは、人間関係に対する考え方がかわったことを反映しているのだろう。

このように日本語のやりもらい表現についても、時代とともに変化する。まして、「うち」と「そと」の区別を重視する言語生活の特徴は、国際的なコミュニケーションに合わない場合がある。韓国での絶対敬語では、自分の尊属について外の人に話すときも敬語が用いられる。また、日本人が多いが、アメリカでは家庭内で父母兄弟に対しても簡単な敬語表現が見られる。したがって、日本語学習者に対して「うちそと」表現を導入する際には、言語生活とその背景にある意識を同時に伝える

桃源郷

が家族と話すときには、ラフな言葉使いが用いられること必要があろう。(戸塚教室・ボランティア)

# 武陵源旅行記

飯田 靖子

## 長沙へ

先ず上海経由で長沙へ向かう。時は5月、生憎の雨の中、常徳郊外にある桃源郷を歩いた。桃源郷は約1,600年程前に陶淵明が「桃源記」に書き記した憧れの「世外楽土」である。此処では寺や廟、秦人古洞などを見学したが、風光明媚なこの場所はやはり桃の季節に訪れたかった。

## 風景遊覧地区「武陵源」へ

慈利県を経ておよそ5時間かけてのドライブだったが、その間林立する奇峰、奇岩が絶え間なくき、我々の伴走をしてくれているようで、名だたる風景遊覧地区「武陵源」まで退屈する暇もなかった。

武陵源は湖南省西北部長江中流域に広がっていて、張家界国家森林公園、天子山自然保護区、索溪峪自然保護区から成っている。武陵源の歴史はおよそ3億8千万年前にさかのぼる。海底の隆起によって石英砂岩の層が地上に露出し、やわらかい砂岩が風雨で浸食され深い谷が刻まれていっ

たとのこと。この一帯の山峰は全て武陵山脈の一部で、武陵山脈は中国全国の山岳の特徴を全て持ち合わせているという。

## 張家界

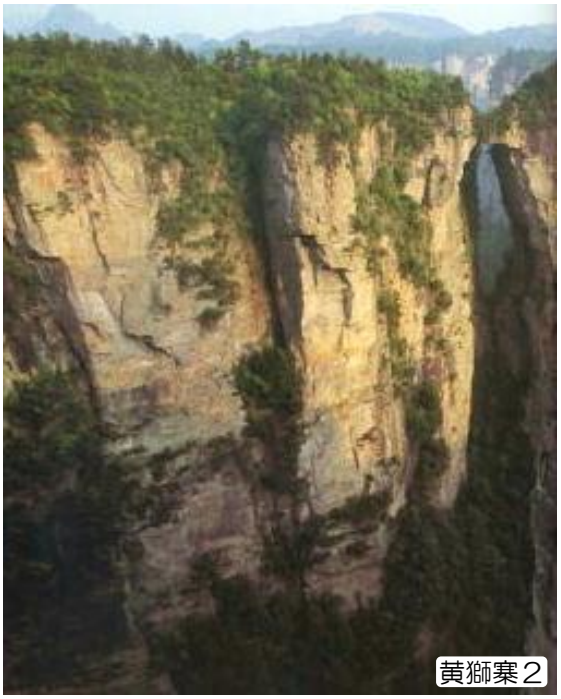
張家界は武陵源一の絶景だといわれている。渓谷の水は長江へと注いでいて、300平方キロの広大な土地に林立する奇峰、奇岩は3千を超え、800を超す水流、岩石、湾曲した渓流が素晴らしい景色を織り成している。

午後金鞭渓へ。石畳の遊歩道が整備された紫草潭を渓谷沿いに往復3キロの道程だったが、ゆっくり散策し自然が形成する山水画廊をじっくり鑑賞した。渓谷の入り口は金鞭岩や睨みを利かした酔羅漢の大岩峰が聳え立っていた。四季を通じて青々と止まることなく流れる金鞭渓は水面に無数の奇峰を投影し、緩やかに曲折しながら山の方へと流れを変えている。両側には古木の松林や自生した小さな愛らしい草花が、水中にはのんびり泳ぐ魚も見られ、時折林の間を飛び交う鳥の羽音がなければ不気味なほどの静けさだ。

## 黄獅寨

9時出発、山頂までは4キロの石段が続く。仲間の半数は駕籠に乗ったが、私は自力で登る決心をし、なるべく上を見ないように一段一段踏みしめながら登って行った。登り始めた時は雨が降っていたが、現地ガイドの「麓は雨でも、頂上はきっと晴れていますよ」の言葉通り登るほどに晴れてきた。暫らく登ると突然夢幻の世界が現れた。「5歩1景」といわれている様に、5歩歩めば景色が変わり、10歩歩いてみれば天と地の様相が変わっている。歩を移す

黄獅寨１


黄獅寨２

ごとに眺めがまさに千変万化し、雲や霧が加わると幽玄且つ壮大な奇観が惜しげもなく連なり、まるで名水墨画家が画く大作の世界に身

張家界紫草潭

を置いているようだ。此処を訪れた人が「山中を歩けば画の中を行くが如し」と言うのも頷けた。2時間半かけてやっと頂上に辿り着いた。観景楼の最上段に上がると数十キロ四方が余すことなく見渡せ、一刻一刻変化する景観は見飽きることがなかった。白雲が山閣を取り巻くと白帯を結んだ美女の姿に、山頂を旋回すると白髪を乱した老人の姿に見える。霞たなびく風景の中に立つと仙境に身を置いている実感がして来る。地元の人は「黄獅寨に登らなければ張家界に来たことが無駄になる」と言っていた。

## 土家族

土家族

武陵源には土家族、白族、苗族等の少数民族が暮らしているそうだが、土家族が一番多いとのことだった。土家族は開放前迄差別と圧迫を受けていて、その為民族名を偽ったり、山岳や洞窟で隠れるようにひっそりと生きてきたそうだ。断崖絶壁に生える貴重な薬草を採って生計を立てていたらしい。下山の途中、土家族の嫁ぐ前の娘さんが唄う「哭嫁歌」を聴いた。「哭嫁歌」は嫁ぐ前に短くても10日から15日、長くは2ヶ月間も延々と唄い続けるそうだ。これは単に両親の愛育に感謝し、別れを告げる気持ちを訴えるだけでなく、自己の才知をも示す事になり、一人の娘にとって「哭嫁歌」が唄えるかはもとより、いかに親に対する感謝と惜別の感情を歌に込めて表現できるかは自己の名誉、人望に関わるので12、3歳になると習い始めるとのことだった。感情を込め物悲しく唄うので、唄い始めると聴いている人は何時も涙させられると聞いた。暫らく聴いていたが、言葉は分からなくても感情は十分伝わってきて、音調が耳に残りいつまでも立ち去り難かった。

## 天子山

張家界に別れを告げ天子山へ向かった。天子山は索溪峪の東部、張家界の南部に接している。先ず、神堂湾、点将台、賀龍公園の展望台に登った。目の前に果てしなく広がる岩峰群に目を見張った。それぞれ特徴ある姿形は、まさに大自然が創り出した彫刻の展覧会。塀の様に幾重にも張り出している岩、峰々は名実共に峰林の王だ。見える位置ばかりでなく太陽光線の

天子山

強弱が峰群に変化を与え、全く別の表情を見せてくれる。断崖絶壁に生える松は野鳥によって運ばれた種が芽を出し、岩の隙間に根を伸ばして成長したものだ。水分を雨や霧から吸収する力強い生命力を持つ松の木は、不老不死の仙人の食べ物と考えられていたようだ。此処にも人に侵されていない自然がふんだんに残されていた。中国人は奇岩、奇峰に命名するのが好きだ。花束を抱えているように見えるのは「仙女献花」、胸に赤ん坊を抱いている母親に見えるのは「母子峰」、その他「将軍岩」、「採薬老人」、「御筆峰」等等。連なる五つの峰、目に見えない天国を支えている巨大な橋桁は天橋遺墩と呼ばれている。此処でも「天子山に来なければ云々」と言っていたが、それぞれ尤もだと思った。

## 索溪峪へ

張家界の西、天子山の北に位置していて標高は二つの自然保護区より高い。大自然が創り出した造形美は武陵源の地下にも見ることができた。此処は張家界、天子山とは異なり黄龍洞、駱駝洞、観音洞等の大きな洞窟群のある所だ。一行は1982年に地元の農民が偶然発見したという中国で二番目に大きい地下鍾乳洞「黄龍洞」へ入った。20万年かかってできた総延長28キロの鍾乳洞だ。石筍の数は1,700本以上、1年に0.2ミリずつ延び続けている12センチ程離れた2本の石筍は600年後一つに繋がり1本の柱となると説明された。洞内で小舟に乗り、くどい多色のライトで浮かび上がる石筍群を見ながら遊覧して、自然の贈り物には自然色が似合うのにと心の中で呟いたが、竜宮城にでも招待してくれようとするサービスなのだと思う事にした。

## 宝峰湖

希望者のみ宝峰湖へ出掛けた。宝峰湖は山上にある湖だ。水面は磨かれた鏡のようで、四方を青山に囲まれている。遊覧船から俯瞰すると峰や山の投影が澄んだ

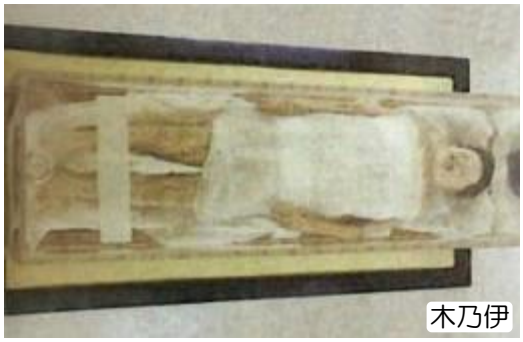
湖に見られ、中国の博物館でよく見られる精密な彫刻を施した翡翠のように美しかった。同船していたシンガポールからの旅行者達と一緒に「Wonderful！」「很好看！」を連発。

ここ武陵源が広く知られるようになったのは1970年代のこと。嘗ては霧の中に隠れていた仙境は土家族だけのものであった筈だが、1992年にはユネスコの世界遺産に登録されるや一躍観光客の注目を集める事となり、この素晴らしい景観は今では人類共有の財産になっている。その陰には世界遺産を守るため、標高1,000m近くの山上に有った畑を耕す事も許されず、移住を余儀なくされた土家族の苦労があるのを忘れてはならない。今では長さ326mに及ぶ世界最長のエレベーターが山頂へ一気に人を運んでいるようだ。楽々頂上へ到達できる反面、一歩一歩登りながら変わり行く景観に目を見張ったり、土家族の「哭嫁歌」を耳にすることはできないだろう。当時文明の利器が無くて良かったと思うのは負け惜しみだろうか。

## 再び長沙へ

長沙は毛沢東の故郷でもあり、多くの革命家を輩出した所でもある。毛沢東の縁の地岳麓山へ行った。彼が若き日好んで訪れた所だという。今でも彼の手による「愛晩亭」の3文字がサインと共に鮮明に残っていた。

その後湖南省博物館を見学。此処は馬王堆から出土した文物が数多くある所だ。馬王堆は高さ100m強、直径30mの古墳である。1号墳から発掘された軑侯夫人の木乃伊を見た。発掘当時遺体は赤い液に浸かっていたらしい。取り出したとき、皮膚はまだ弾力性を残し、四肢の関節は動かせたそうだ。この様に保存状態が極めて良かったので当時世界中の話題になり、ＴＶでも放映された。ガラス越しではあったが遺体とホルマリン漬けの内臓がはっきり見えた。胆石等内臓系の持病があったらしく、黒い肺は喫煙していた事を物語っている。解剖した時には、胃から瓜の種が出てきたので夏に死亡したというのが学説らしい。中国の最新技術を駆使したこの地下展示室を目の当たりにし、ＴＶの映像で見たときの驚きとは又違った驚


木乃伊

きをもった。

浮世離れした数日間を過ごしたせいか、帰途機上の人となってもまだ夢現であったが、ニコリともしない空中小姐に機

内食を放り投げられ、長い夢は弾けて飛んでいった。＜1995年5月、9日間の旅＞

（横浜教室・ボランティア）

# 活動の原点を忘れないで・・・・

中 和子

1988年設立以来沼波代表の下、中国帰国者を中心に日本語が不自由な方への支援の輪を広げてきたユッカの会。日本語を母語としない子どもたちへの補習教室活動は、神奈川県でも草分け的な存在です。

20年余り継続した活動で培ったノウハウと、中国帰国者への思いが凝縮し、今年度も80名を超える子どもたちが補習教室に参加しています。

7月に開設された神奈川県国際交流協会教育相談コーナー、6月にはその相談員との情報交換が行われ、そちらからの紹介も増えています。また、中学生時代、補習教室で学んだ高校生のボランティア体験の受け入れという新しい試みも行われています。

今年は神奈川県ともしび運動30周年記念行事が行われるなかで、県社会福祉協議会との協働事業ITサロンの活動がテレビかながわで紹介されました。

教科補習でも日本語でもユッカの会の場合は1対1で毎週1回、ニーズに応じて1年、2年同じ人が関わり続けます。そしてこの学習形態からボランティアと学習者との信頼関係を築くことができたとき、初めて学習効果も期待できると・・・多くのボランティアが気づいています。

マスコミで毎日取り上げられている「いじめ」の記事を見るたびにユッカの会で関わった子どもたちの顔が浮かんできます。設立当初より多くのボランティアがこの問題と向き合ってきました。

補習の時間、ハイキングやキャンプの折、または深夜の電話で子どもたちの声をじっくり聞く中で、学校や教育委員会に訴えて大騒ぎするだけが解決の道でないことも学びました。「どうせ外国人だから・・・」と思いがちな子どもたちには結論をそこに落としてしまったら将来何の解決策も見つけられなくなってしまうことを・・・。一人ひとりの可能性を信じていることを・・・。そんなメッセージを送り続けてきました。

ユッカの会の活動の場はいじめ、孤立する子育て、急増するニート、高齢者の独居など生活課題が鮮明に浮き彫りされる場でもあると思います。直面する課題に目をそらすことなく向き合ってきたボランティアの経験を文字化し、情報を共有する時がきたように思います。その意味で2007年度はユッカの会20周年に向けてこれまでを振り返り、これからを見つめる大事な年になりそうです。ユッカの木がこれからも元気いっぱい育つよう整枝し、施肥をし、今、何が必要なのか知恵を出し合

いたいと思います。

## ◆補習教室

補習教室では2006年3月、小学校卒業生4名、中学校卒業生25名が無事卒業しました。

近年、高校進学の相談だけでなく、大学受験や、高校卒業後の進路、就職相談が増えていること、高校生の教科学習、中学既卒者や、高校編入希望者への対応と日常活動が多様化しています。また、小、中学校の取り出し授業への依頼、高校生のボランティア体験の受け入れなど地域に定住する子どもたちの増加に伴って、様々な対応が求められました。

他団体、他機関と連携しながら多様化してきているニーズに適切に対応できるよう事務局で話し合いを行っています。今年度、大学生のボランティアが増えたことは、子どもたちにとって喜ばしいことですし、補習教室活性化に期待が持てます。また、理科実験教室はユッカの会内部で講師をお願いできるようになりました。ボランティアの層の厚さがこんなところからも伺われます。

## ◆日本語教室

事務局会議の折「今月は学習者15名待機です」などと報告があり、対応に大わらわの1年でした。県社協、生涯学習支援センター、国際交流協会等へボランティア募集のチラシをお願いしました。1対1の学習が人気の的のようですが、200名を超える学習者を抱え対応しきれないのが現実です。

12月には県社協から神奈川新聞に募集広告を出していただくことになりました。場の提供、資金援助、ボランティア紹介など県民センター12階、県社会福祉協議会ボランティアセンターはユッカの会の活動にとって大きな支えです。

## ◆パソコン教室

今年度は指導者の森さんのご都合で8月から12月、パソコン教室はお休みしました。学びたいことをその場で教えてもらえる、パソコン教室は魅力があり、休室中不便を感じた方がいらしたことと思います。2007年1月から再開します。

## ◆フリートーキング・手芸の会

携帯電話用のストラップを作ったり、素敵な毛糸で帽子を編んだり、出来上がった製品がお店でも売れるようなものばかり、早速身に着けて･･･とこの教室は大人気です。また、母語で教えあったり、手と口を同時に動かして様々な情報交換できる場としても人気があります。

指導してくださる方々は参加者が増えるたび、材料の準備から大変な作業をこなし、当日は、「鈎針は初めてです」なんて言う方に鈎針の一歩から丁寧に指導し

てくださる･･･飯田さんのお仲間に感謝です。こういうお仲間がユッカの会の活動を支えてくださっているのですね。成人を祝う会然り、こちらも大畑さんのお仲間が昨年に続き、着付けをしてくださいます。

## ◆交流活動

4月のお花見は70名の参加者があり、交流活動の人気にうれしい悲鳴をあげました。バーベキュー会は雨天のため中止。次の日曜日ぜひ実施して欲しいとのお電話を数名の方からいただきましたが場所確保が無理なのです。買い込んだ野菜類は戸塚の日本語教室で買っていただきました。

交流活動の一つにボランティアの交流も考え、県議会を見学しました。いつもはお会いしても作業に追われるボランティアですが、このときはゆっくりとおしゃべりができ、このような機会が多くなれば、活動の理解につながると思いました。また、恒例のバスハイクは今年も171名の参加でミカン狩り、栗又の滝見学を楽しみました。

いよいよ1週間後にはクリスマス交流会です。今回も湘南白百合学園からプレゼントが届きます。感謝です。

## ◆地域教室

お花見、料理教室、浴衣を着る会、防災センター見学等を多くの参加者と楽しみました。ITサロンは2年目を迎え2つのグループで活動しています。中山さんの中国語の指導が大きな助けになっているようです。

10月からの無料パス廃止でゆれた教室ですが、10月に入っても大きな変化はないのですが、何人かがこの2ヶ月一度も参加されず気になっています。

この教室活動を通して、様々な生活情報が飛び交い、お友達の輪が広がっています。教室の運営は経済的に苦しくなるばかりですが、活動が先細りしないよう助成金を検討しなければなりません。

～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～

## ＜教室活動＞

（以下 ●は実施済み、○は予定を示します）

### (1) 補習教室

❶通年 主にマンツーマン形式

❷KIAとの意見交換会（教育相談について）6月27日

❸キャンプ 8月10日/12日 54名、キャンプミーティング 7月15日、8月5日

❹集中教室

●夏の教室 8月20日、21日

○冬の教室 12月23日、２４日

○春の教室 3月

❺勉強会-1（ネットワーク協力事業）

高校進学説明会 9月10日

❻勉強会-2（ネットワーク協力事業）
情報ネットワークに向けて 10月18日

❼学習言語　5000語アンケート協力

❽港中学校　授業参観
港中学、上飯田中学　運動会
上飯田中学　文化祭

❾現況
・大鳥小学校、山崎小学校(鎌倉)への対応
・翠嵐高校　ボランティア体験受け入れ
・高校受験受け入れ　既卒、夜間中学生編入試験
・高校生の補習受け入れなど
・冬の教室ちらし配布について
教育委員会ポスト利用

(2)日本語教室

❶通年 主にマンツーマン形式、
平均週1回の日本語指導

(3)パソコン教室

❶通年 週一回を基本に個人指導
※8月～12月 休講　2007年1月から再開予定

(4)フリートーキング・手芸の会

❶携帯電話ストラップ作成　6月22日

❷帽子作成　11月6日

(5)地域教室

❶日本語教室実施：横浜教室、戸塚教室

❷浴衣を着る会　7月20日

❸地域教室（交通費問題調査 9月実施
県に提出）

❹料理教室　9月21日　アースプラザ

❺ＩＴサロン　ともしび運動30周年記念
テレビ取材　9月

❻防災センター見学　10月19日

＜交流活動＞

❶お花見　4月4日

❷バーベキュー会 雨天のため中止(5月28日)

❸県議会見学　6月28日

❹バスハイク　11月12日

❺沼波さんを囲んで　12月2日

⑥クリスマス交流会　12月16日

⑦成人を祝う会　1月21日(日)

⑧餃子の会　2月4日

⑨卒業を祝う会　3月

＜ボランティア自主研究活動＞

❶日本語勉強会 日本語指導について自主研究　毎月第3土曜日 10：00～12：00

②研修生を囲んで 1月20日

＜協働事業＞

❶神奈川県社会福祉協議会との協働事業
ITサロン(パソコン教室：対象 中国帰

国者)

❷神奈川県保健福祉部生活援護課
地域教室 しゃべり場2002（対象：中国帰国者)

## ＜地域への参加･他団体との交流・研修＞

❶日本語教育に関する研修講座(文化庁日本語教育大会　8月9日など)

❷外国人児童生徒の学習支援に関する研修講座（「年少者日本語教育学を考える会」の第5回研究集会11月23日など)

❸サポセン大掃除：7月17日、○12月23日

❹県サポートセンター10周年記念イベント協力･参加　5月21日

❺アースフェスタ2006　6月3/4日
お茶コーナー（企画：林麗民)
展示コーナー

❻市民活動フェア：スピーチ大会（国際ネット協力）3月16日
実行委員会協力（高校生ボランティア参加)

❼ボランティアのための勉強会（他団体との共催事業）
かながわ県民活動サポートセンターネットワーク事業協力

⑧集中補習教室 ネットワーク事業協力

冬の教室　12月25日、26日（大船NPOセンター)

⑨ボランティアセンター利用者懇談会　3月

⑩市民活動フェア：スピーチ大会　2007年3月17日

## ＜事務局＞

❶平成18年度第1回連絡会（5月21日 12：00)、第2回連絡会（12月2日）

❷現況調査　5月

❸通信№27号 5/21発行、№28号 9/13発行、○№29号　2007.1月

❹県サポートセンター10周年記念イベント参加　5月21日 14：00

❺ボランティア交流会（戸塚）6月25日

❻たより№18　12月16日発行

❼報告書作成：補習教室見学会報告書 5月1日

❽クリスマスプレゼント
白百合学園から連絡　11月15日

❾ロッカー、レターケース申し込み

❿NPO法人化検討委員会　発足　11月

※その他
・会場予約は中村さん専任
・神奈川ふれあい子どもサミット参加依頼について検討

※助成金：残留孤児援護基金
神奈川県社会福祉協議会

横浜市市民局
神奈川新聞厚生文化事業団

## ＜その他＞

❶受賞

・横浜市社会福祉協議会　感謝状　11月
・補習教室学習者（作文）鎌倉市市長賞　10月

❷委員

文化庁委嘱

・「地域ボランティア活動支援推進事業委員会」　2006年3月まで
・神奈川県「かながわ民際協力基金審査委員会」
・神奈川県社会福祉協議会「参加と協働推進委員会」
・かながわ県民活動サポートセンター連絡協議会

❸活動紹介

・かながわテレビ　ともしび運動30周年記念　9月15日
・日本地域福祉学会NEWS（神奈川県社会福祉協議会：松永文和氏）　11月

❹その他

●かながわボランティアセンター主催
かながわの地域福祉 フォーラム 2月22日
○防災ギャザリング07 エンパワメンと‘07　　2007年1月15日

## ＜今後の検討課題＞

①ボランティア推薦状（海外ボランティアなど）

②ボランティア募集（ボランティアセンター協力）

③NPO法人化について

～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～☆～

（ユッカの会 事務局長）